

ジェンダー教育と平等

— 哲学教育導入の試み —

稲垣 恵一

Key word : 「ジェンダー」「平等」「教育」「哲学」「理念」

1. はじめに

筆者はこれまで短期大学や看護系の専門学校等、女性学生のきわめて多い大学で教鞭をとることが多かった。担当した講義科目は哲学系の科目であるが、生命倫理や人間の包括的な理解を目指すことが目的とされている。これらの講義では、生殖補助医療等学生が将来直面するかもしれないトピックを扱ってきた。講義の感想を学生に書かせてみると、学生たちは一方では出産や育児を人生の一大事であると考えているのに、他方で生殖補助医療を使用せねばならない女性あるいは人工妊娠中絶をせざるをえないような状況に置かれた女性に対して厳しい見方を持っていることが判明した。また、講義後にミニレポートを学生に課しても真剣にそれに取り組めない学生は少なくなく、中には女性らしさを売りにするような学生もいた。そこで、筆者は問題の根は学生個人にではなく、むしろ何かジェンダーにあるのではないかと見当をつけ、その次の年からジェンダー論を講義の一部もしくは全体で扱うことにした。というのは、そうすることで自分のことをまじめに考える視点を学生に与えることができるのではないかと考えたからである。しかし、学生には平等の視点がないせいでジェンダー平等や自立を一部の学生が受け入れてくれないという困難に筆者は直面してしまった。そこでおそらくは学生たちの持ち合わせていない平等、あるいは、学生たちが受け入れている文化にはない平等の概念があるのではないかと筆者は考えたのである。

こうした経験を踏まえ、本稿では、学生たちが受け入れている文化にはない平等の概念が西洋近代思想の生み出した平等の理念であるとし、それをジェンダー教育の一環としてもしくはそれとは別に哲学や倫理学で教育する必要があるということを提唱することを目指す。第一に、ジェンダー論のスタンダードな教科書の採ってきた戦略と今の学生の現状を確認する。第二に、一部の学生たちがなぜジェンダー平等を誤解しそれに反対するのかを明らかにする。第三に、西洋近代思想における個人の平等とはどのようなものかをトマス・ホブズとイマヌエル・カントの議論の中に見出し、それらの導入こそがジェンダー教育にとって必要不可欠であるということを提唱したい。

2. ジェンダー論の戦略

ジェンダー論が目指すのは言うまでもなくジェンダー平等である。どんな教科書もそれを目指して書かれている。そこで、ジェンダー平等の実現のためにジェンダー論の基礎的な教科書がどのような戦略をとっているのかを概観してみることにしよう。筆者がこれまで講義で使用もしくは参考にしてきた教科書は、伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子『女性学・男性学—ジェンダー論入門—』（有斐閣アルマ、2002年）（以下、『女・男性学』）である。この手の教科書は女性学に偏りがちであるが、上掲書は男性学の視点も盛り込まれている。また、劇画が挿入されており学生を飽きさせるのを防ぐ工夫もされていた。とはいえ、ジェンダー論の知識のレベルは落とさず基礎的な知識は十分に説明されている。学生が討論しながら考えるような工夫もされている。以上の理由から上掲書を講義で採用した。

『女・男性学』の第1章のテーマは、「女であることの損・得、男であることの損・得」である。これが、第1章に置かれているのは重要である。なぜなら、ジェンダーを最も身近に気づかせるのは損得の感覚であり、そこに身体差や社会構造が反映されているからである。そうした感覚を学生が多かれ少なかれ持っていれば、ジェンダー平等が実現していないということに少なくとも気づくことはできるからである。従って、損得の感情はまさしくジェンダー論への入り口だと言えよう。まず、伊藤は、大学生を対象に実施したアンケート調査の結果から言えることを示している。¹⁾「女であることの得」では、「人前で泣ける」、「失敗をにっこり笑ってごまかし、泣いて握りつぶす」、「花やケーキを買っても恥ずかしくない」、「女性への割引、特別サービスがある」、「甘えられる」、「女が少女漫画を買っても変に思われないが、男が少女漫画を買うと変」というのが挙げられている。「女であることの損」では、「結婚すればいいから成績はどうでもいいと言われた」、「娘に大学教育は無駄だと父が言った」、「痴漢、セクハラにあう」、「夜一人で歩くと怖い」、「門限がある」、「女からデートに誘えない」、「男性は性体験を語るが、女性が語るとふしだらだといわれる」が挙げられている。「男であることの得」では、「就職しやすい」、「賃金、地位の上昇がある」、「独立して生活しやすい」、「化粧をしなくてよい」、「洋服などに金をかけなくてもよい」、「たばこを吸つてもうるさく言われない」、「上半身裸で歩いても平気」、「家事をしなくてよい」、「結婚したら上位に立てる」、「上座に座れる」、「子育てをしなくてもよい」、「夕食がいつもできている」、「親からあまりうるさく言われない」、「行動が自由である」、「痴漢にあわない」、「夜道がこわくない」、「レイプされない」、「門限がない」、「冒険ができる」、「トイレに並ばなくてもよい」、「生理がない」、「出産しなくてよい」、「妊娠のおそれがない」が挙げられている。「男であることの損」では、「強さを要求される」、「業績、出世を要求される」、「弱音をはけない」、「経済力を要求される」、「泣くと弱虫といわれる」、「体力的にきついことをやらされる」、「体罰を受けやすい」、「汚れ仕事をやらされる」、「セックスでリードしなければならない」、「性関係で責任をとらされる」、

1) 『女・男性学』, pp.2-7.

「家の後継ぎにされる」、「デートで金を払わされる」、「大学で理科系を強制される」、「ピアノを習いたかったが柔道をやらされる」、「家事をしようとするとき止められる」が挙げられている。

これとほぼ同じ調査を筆者が講義を受け持っている複数の大学の学生にも実施してみた。アンケート項目は以下のとおりである。²⁾

- (1) 性別
- (2) あなたの性別で得をしたのはどんな時ですか？
- (3) あなたの性別で損をしたのはどんな時ですか？

なお、ジェンダー差別を誘導操作して結果を出すのをできるだけ排除するため、自由回答とした。

紙数に制限があるのですべての結果を本稿に掲載することはできないが、上で伊藤が挙げた項目については以下のような結果が出ている。また、筆者が採ったアンケートで多かった項目についても以下の表に併せて掲載した。かなり多様な回答を得られた半面、表現の抽象的な回答や、学生がどういう場面をイメージしているのか把握しにくい回答もあった。それらについては、伊藤が挙げた項目に相当すると筆者が判断した回答をそれぞれの項目にカウントした。表現が異なっても同じ意味のことを言っている回答は筆者がひとまとめにした。さらに、伊藤が挙げた項目でも筆者のアンケートで0だった項目については表には掲載していない。

アンケート総数 女性247名 男性89名
表1 女性であることの得(女性) [複数回答可]

【伊藤の挙げた項目】	
失敗をにっこり笑ってごまかし、泣いて握りつぶす。	15
花やケーキを買っても恥ずかしくない。	2
女性への割引、特別サービスがある。	115
甘えられる。	7
女が少女漫画を買っても変に思われないが、男が少女漫画を買うと変。	1
【筆者のアンケートで多数項目】	
中学の体育で女性しかできない競技があったり、競技の身体的負担が軽かったりした。	26
出産できる。	23
レディファーストしてもらえる。	18
女性というだけで男性から可愛がられる。	15
肉体労働を求められない。	51
仕事の責任が軽い。	12
女性専用車両に乗れる。	10

2) このアンケート項目のほかに、「男女がお互いに助け合うとはどのようなことであると考えますか?」、「男の優しさと女の優しさは同じだと思いますか?」、「【男女の優しさは同じと答えた人のみ】優しさとはどのようなものですか?」、「【男女の優しさは異なると答えた人のみ】男の優しさとはどのようなもので、女の優しさはどのようなものですか?」という項目のアンケートもとったが、本稿にはその結果を掲載できなかった。ただし、男女の助け合いに性差は関係ないと答えた学生が80名もいたのは特筆に値する。

表2 女性であることの損（女性）〔複数回答可〕

【伊藤の挙げた項目】	
痴漢，セクハラにあう。	16
夜一人で歩くと怖い。	5
門限がある。	7
【筆者のアンケートで多数項目】	
体力が弱い。	41
容姿が重視される。	26
生理がある。	25
力仕事に就けない，女性に就けない職種がある。	25
家事を強制される。	21
女らしい言葉やしぐさを強制される。	17
女だから軽視される。	15

表3 男性であることの得（男性）〔複数回答可〕

【伊藤の挙げた項目】	
親からあまりうるさく言われない。	3
行動が自由である。	1
門限がない。	1
冒険ができる。	3
トイレに並ばなくてもよい。	4
生理がない。	3
上半身裸で歩いても平気。	6
化粧をしなくてよい，洋服などに金をかけなくてもよい。	13
就職しやすい，賃金，地位の上昇がある，独立して生活しやすい。	2
【筆者のアンケートで多数項目】	
スポーツで優秀。	28
犯罪被害者になりにくい。	8

表4 男性であることの損（男性）〔複数回答可〕

【伊藤の挙げた項目】	
強さを要求される。	4
業績，出世を要求される，経済力を要求される。	4
弱音をはけない，泣くと弱虫といわれる。	1
体力的にきついことをやらされる。	11
体罰を受けやすい。	1
家の後継ぎにされる。	2
デートで金を払わされる。	2
【筆者のアンケートで多数項目】	
おしゃれしにくい。	8
女性専用の場所に入れない。	11

筆者のアンケート結果では伊藤の挙げた項目が必ずしも高数値を得ているわけではない。とはいえ、伊藤は女性の損得のアンケートから、女性が「保護される存在」、「労働や社会参

加における限定」を受ける存在、「男性にはない行動範囲・時間の限定」を受ける存在、「見られる性」であるという結果を導いており³⁾、筆者のアンケート結果も大方この結果と一致する。伊藤は、男性の損得のアンケートからは「産む性でないことから生じる自由さ」、経済面での「男性主導の仕組み」、「見る性」、「〈強さ〉や〈忍耐〉……が要求される」等の結果を導いており⁴⁾、これもまた筆者のアンケート結果と大方一致している。

これらの根底にあるのは、女性は男性よりも身体的に弱く、産む性であるということである。つまり、それは、女性の身体が原因で女らしさが生み出され、また、男性の身体が原因で男らしさが生み出されるということを意味するのである。そこで伊藤は、マーガレット・ミードのニューギニア地域の三つの社会集団における男女の性格・役割を示すことで、ジェンダーつまり「女らしさ」、「男らしさ」をセックス（生物学的性）から区別する。つまり、分かちがたく結びついているセックスとジェンダーの緊密な因果関係を断ち切るのである。セックスも女男の二つに分かれるわけではなく、実際にはテストステロンとエストロゲンの様々な組み合わせが存在するのだから、これらによって個体を女男のどちらかに振り分けるのが困難だということが指摘されている。また、様々な性的指向性があるということも併せて指摘され、「女／男」の二元論では性について十分に語ることはできないということが示されるわけである。

こうして、『女・男性学』では第2章以降、教育、恋愛、労働、家族、育児、クローバライゼーション、ジェンダーフリー社会のそれぞれについて、ジェンダーが文化的なものつまり作られたものであって、固定的なものではないということが論じられている。最終的にジェンダー論が目指すところは、伊藤の言葉を借りれば、「男と女という分類が強調されることで、実際に存在している個々の多様性が押し潰されてきた状況から、1人ひとりがそれぞれ〈違う〉社会」⁵⁾ということになるだろう。

以上が『女・男性学』が採った戦略だが、他の教科書でも大体同じような戦略を採っている。例えば、加藤秀一『知らないと恥ずかしいジェンダー入門』（以下、『ジェンダー入門』）でも、やはり、第1章で、「性そのもの・性自認・性差・性役割」が、第2章でジェンダー論の歴史が、第3章でセックスが、第4章で差別のかたちづくられるメカニズムが、第5章で性差と規範としての性役割の関係（セックスとジェンダーは必ずしも結び付かないということ）が、第6章でセクシュアリティとジェンダーの違いが、第7章でバックラッシュが説明されている。

『ジェンダー入門』は、筆者が見る限り抽象度が高く、初学者が補助教材なしにこれを理解するのは困難であろうと思われる。というのは、それもそのはずでこのテキストを加藤は、加藤・石田仁・海老原暁子編『図解雑学・ジェンダー』（以下、『図解ジェンダー』）の姉妹品と位置づけているからである。『図解ジェンダー』の目次は、序章 性の常識を打ち破れ！、第1章 「男らしさ」「女らしさ」、第2章 恋愛・結婚・家族とジェンダー、第3章 「産む・産まない」とジェンダー、第4章 労働とジェンダー、第5章 性暴力と性の商品化、第6章

3) 『女・男性学』, pp.2-7.

4) 『女・男性学』, pp.2-7.

5) 『女・男性学』, pp.292.

多様な性の世界, 第7章 ジェンダーの過去・現在・未来である。『図解ジェンダー』は具体的であり、『ジェンダー入門』の理解のためには『図解雑学・ジェンダー』を必要とするのである。また、目次からも分かるとおり、議論の順序こそ『女・男性学』とは多少異なるものの、『図解ジェンダー』は『女・男性学』と同じ戦略を採っている。『ジェンダー入門』は、それだけを見れば『女・男性学』とは異なった戦略をとっているように見えるのだが、『図解雑学・ジェンダー』をセットにするならば、『女・男性学』と戦略を異にするものではない。

3. ジェンダー論の躓き

女(男)性は女(男)らしくすべきという規範の意識は、女(男)性の身体が原因で女(男)らしさが生み出されるという信念によって支えられている。例えば、どんな地域に暮らす人の胃であれ、胃は同一の消化機能を等しく持つ。うまく機能しない胃は、病んでいると判定される。それと同じように女(男)らしさも考えられるならば、女性(男性)の身体が生み出す女(男)らしさもまた世界中の女性(男性)に共通でなければならぬ。例外は許されず、例外は必然的に病気と見なされなければならない。ところが、病気でもないのに女(男)性のあり方が多様であるとすれば、さらに厳密に言えば、病気でもないのに女(男)らしくない女(男)性の事例が一つでも発見されたならば、女(男)性の身体が原因で女(男)らしさが生み出されるという信念は論理的に崩れる。従って、ジェンダーをセックスから切り離す議論は、論駁するのがきわめて難しい強力な議論なのである。

ここで性差の事実と性規範を区別することに成功する学生が多いのだが、それでも学習をひととおり終えても、ジェンダー論を受け入れられない学生もいる。彼らは、ジェンダー論の議論の核心を十分に理解したがそれでもジェンダー論を受け入れられないのではない。むしろ、ジェンダー論を誤解した上で、言い換えれば、女性は弱く男性に支えられるべき(男性はか弱き女性を支えるべき)という、ジェンダー論が初めに切り崩した信念を捨てずに、セックスでもジェンダーでも女男平等でなければならないという考えを学んだために消化不良を起こしてしまっているということを意味する。セックスでもジェンダーでも女男平等でなければならないという考えとは、性差は全くないとし男らしさも女らしさも全くないとする考え方である。伊藤は、インターネットのインタビューの中でジェンダー論がめざすのは多色刷りの世界だ⁶⁾と述べているが、先の学生たちの考える女男平等は一色刷りの世界なのである。彼らは一色刷りの世界に消化不良という仕方で異議申し立てしているわけだ。

ただし、彼らがそう考えてしまうのも無理のない面がある。というのは、女男の体力では性差よりも個人差が大きいということが明らかにされているのだが⁷⁾、そのことに対して筆者は学生から次のような質問を受けたからである。「女男混合でバレーボールをプレーしたことがあるが、男性学生が自分のチームを勝利へ導くために女性学生にボールを触らせないようにプレーしたせいで、女性学生はコートの中で立ち尽くすだけだった。だから、やはり

6) cf. <http://www.nttcom.co.jp/comzine/no018/wise/index.html>

7) 『女・男性学』, pp.71-75.

体力の女男差は個人差に還元されえないのではないか」という質問がそれである。⁸⁾ つまり、理論では体力の個人差が大きいとどんなに言われていても、その実感を学生は持てないというのだ。そうなれば、これまでは何とか男性に保護されることによって女性は力を持てたのに、ジェンダー論の主張を受け入れてしまうことで男性の保護を受けられず、却って弱い立場に置かれてしまうということになる。そのことを彼女たちは危惧しているのだ。現実レベルでジェンダーとセックスの切り離しができなくなってしまうのである。従って、そう考える学生はジェンダー論を受け入れられず、ジェンダー論は性差を無視した女性差別的な考え方だと見なされてしまうわけだ。

4. 性差にもとづいた男女平等は本当に平等なのか？

現実レベルでジェンダーとセックスの分離に失敗した学生の考えるジェンダー平等とはどのようなものなのであろうか。単刀直入に言えば、それは体力レベルでは男性が強く女性が弱いが癒しや優しさのような情緒レベルでは女性の方が男性よりも優れているので、女性は、体力面で男性から支えられ、保護されたお返しに癒しや優しさを与えるというものである。現実にはある女性よりも体力のないある男性もいるし逆も然りなのだが、そうした人々に対して性規範を強制する思考も彼らには働き、しかも、逆にそれを受け入れない、本来は女性差別的でない人たちの方に女性差別のレッテルが貼り付けられることになる。

彼らの考える平等には二つの軸がある。一つの軸つまり縦軸は、能力主義的な平等である。つまり、何であれ能力の強い者は弱い者よりも多くを得ることができるので、それをそのままにしておけば、利益の不平等が必然的に生ずる。というのは、弱者が多くを得られないのは強者が弱者の分から利益を得ているからである。それで、本来の取り分を強者は弱者に与えるべし、というのが彼らの発想である。こうして、男女の概念が強弱の概念にそれぞれ割り振られるのである。もう一つの軸つまり横軸は、男女で長所短所があるのでそれぞれを足せば、お互いの借りは相殺されて0になるという平等である。つまり、男女一対で0になるという平等なのである。

ここで言われている平等は極めて辻褃の合わないものである。第一に、縦軸の能力主義的な平等を徹底的に採るならば、体力だけを見ても性差よりも個人差が大きいので、平均男性よりも体力のある女性にその力を発揮させないということは、能力主義的な平等を棄損することになる。にもかかわらず、そのことにはなぜか彼らは目を瞑るわけである。第二に、横軸の男女の長所短所を足せば0というタイプの平等は、女性の体力の弱さは男性に対する借りであり、それを女性の癒し・優しさという長所によって男性に返済するということを意味する（男性は逆になる）。しかしながら、体力と癒し・優しさは質的に全く違うも

8) 表1「中学の体育で女性しかできない競技があったり、競技の身体的負担が軽かったりした」、「肉体労働を求められない」等から、身体を增強する機会が女性には与えられていないことが見て取れる。女性よりも男性の方が体力增強の機会を多く得ているわけだから、現実には女男混合でスポーツゲームを行えば、女性がゲームに参加できなくなるのは当然である。従って、女性の体力が本質的に男性のそれよりも劣っているわけでは決してない。

のである。ましてや両者は反意語の関係にあるわけでもなく、量的な比較を受け容れない。にもかかわらず、両者がなぜ等価と言えるのだろうか。もしも両者を等価と見なすならば、それを等価とみなすための基準つまり貨幣のような公平中立な媒体がなければならず、それによって体力と癒し・優しさが量られねばならないはずである。しかしながら、彼らの平等にはそれが全くない。従って、体力と癒し・優しさがなぜ等価で取引されるのかが全く分からないのである。

百歩譲って体力と癒し・優しさが等価であるということ認め、男性の体力を1、癒し・優しさを-1とし、女性の体力を-1、癒し・優しさを1としよう。彼らは、体力レベル、情緒レベルの縦の列の数字を足して、0つまり平等を導く。しかしながら、彼らにとって体力と情緒は交換可能なことから、男女が協力して男性の体力1を女性の体力-1と足すなどという面倒なことをしなくとも、男女の協力なしにすでに0は実現しているのだ。つまり、男性・女性の横の行の数字をそれぞれ足しても0になるのである。もっともそのことは男性は体力だけを持つ存在で、女性は癒し・優しさだけを持つ存在であるということの意味するだろうが、この考えでは男女が対称的な特徴を備えている。従って、男性を1とすれば、女性を-1と表現することもできる（もちろん逆でも可）。しかし、 $1 = -1$ はどうこじつけても成立しないのである。

	体力レベル	情緒レベル	合計
男性 (1)	1	-1	0
女性 (-1)	-1	1	0
合計 (0)	0	0	0

仮に男女の数をそれぞれ足すことで0が実現しても、女性の本質はいつまでも-1であって0にはならないのだ（男性も同様である）。このことは、男女が不平等であるのが不問の前提なのである。従って、そこから男女の平等を導くことは論理的に不可能なのだ。

というわけで、男女の長所と短所を相殺すれば平等が成立するという主張は疑わしい。

5. 西洋近代における個人の平等の理念 —ホッブズとカントの人間論—

男女の長所と短所を相殺すれば平等が成立するという主張が男女平等になりえないのは、男女を量る天秤が彼らの思考にはないからである。そのせいで、総数が0になれば男女平等が成立すると考えられてしまう。しかし、本来の平等はそうではあるまい。むしろ、男と女を天秤にかけたとき、それらが釣り合うことこそが平等なのだ。つまり、男=1、女=1でなければ、男=女という平等は成立しないのだ（もっともこの時には、男女の区別は意味を消失し、個人のみが意味を持つのであるが）。そして、0の値をとるのは、両者を量る天秤自身の重さである。その0に相当するものが、平等の理念なのである。天秤は0なのだから、五感によって捉えられるものとして現実には存在しない。それは五感によって捉えられず、

思考によってのみ捉えられる理念なのだ。だからこそ近代人は理念を提示して、封建制度下にある人々が不平等であるということを明確化して、その不当性を異議申し立てたのである。そのことは、理念が平等を正当化しているということである。個人の平等の理念の射程をさらに女性にまで広げて考えることで女性の参政権の獲得を試みたのがメアリー・ウルストンクラフトである。

西洋近代思想が掲げた個人の平等の理念には二つの方向性があると指摘しうる。一つは、ホブズが『リヴァイアサン』の中で提示したような個人である。ホブズは、「自然は人々を心身の諸能力において平等につくったのであり、その程度は、ある人が他の人よりも肉体においてあきらかに強いとか、精神のうごきがはやいとかいうことが、ときどきみられるにしても、すべてをいっしょにして考えれば、人と人との違いは、ある人がそのちがいにともづいて、他人がかれと同様に主張してはならないような便益を、主張できるほどに顕著なものではない、というほどなのである」、「もっとも弱いものでも、…〈中略〉……もっとも強いものを殺すだけの強さを持つ」⁹⁾と述べている。このことは、人々の能力がオリジナルとコピーが同じであるように現実に同じだということ、つまり伊藤の言葉を借りれば、一色刷りの世界を意味しない。そうではなく、もっとも強い者を殺すだけの強さを持つという平等の基準に照らしたときに、個々人の能力に差があったとしても、それは大した差ではないということである。「もっとも強い者」は理念である。というのは、現実には今現在のもっとも強い者よりもさらに強い者を常に見出すことができようが、もっとも強い者よりもさらに強い者がいない場合に、最も強い者という概念は成立するからである。個々人の能力が違っていても平等だというのは、個性の内容は異なっても各人が個々の特徴を持っている（つまり個性を持たない人は誰もいない）という点で個性が捉えられている。この意味で、ホブズの考える個人の平等は理念である。

もう一つの個人の平等の理念はカントの実践哲学での理性的存在者に見られる。カントは、『実践理性批判』の中で「君の格率が、常に同時に普遍的立法の原理として認められるように行為せよ」¹⁰⁾と述べている。ここで言われているのは、自分の取り決めたことに他のすべての人たちも従ったとしても破たんしないような取り決めに従って行為しなさい、ということである。この取り決めが道徳法則であり、それに従いうる人間はすべて平等である。つまり、道徳法則はA氏には適用されるが、B氏には適用されないということはないのだ。ここでは、AとBは理性を持つつまり自然衝動に抗して道徳的な行為を遂行する能力を持つ限りで平等なのである。これもまた理念にすぎない。というのは、人間は理性的存在者であるのみならず感性的存在者つまり身体を持つ存在者でもあるから、道徳法則に従おうと努めてもそれに合致することはできないからである。

個人がそれぞれの能力を持っているというところに重心を置くのか、それとも個々人で異なる様々な能力を取り去ったあとに残される理性的存在者としての人間の特徴に重心を置く

9) トマス・ホブズ『リヴァイアサン』(一)、水田洋訳、岩波文庫、p.207.

10) *Kant's gesammelte Schriften*, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften Bd. V, Berlin 1902ff., S.31.

のかで人間の理想やそれにもとづいて構想される社会は異なる¹¹⁾。しかし、これらの理念の前提には、男女の能力を足せば0になるという発想はなく、むしろ個人を等しく1と見なすという発想が共通して見られるのである。だからこそ、個人が1と見なされなかったときに、それは不平等であると明確化され、平等な他者に対して異議申し立てできる足場を得ることができた。ホッブズ以降の社会契約論でも、個人が1つまり平等であり、そうした諸個人が等しく従うことのできる法を設定することで社会ができると考えられた。従って、社会には個人の平等が前提されていたのである。

6. おわりに—ジェンダー教育と平等—哲学教育導入の試み—

それぞれの身分に見合った行動様式や取り分があるという伝統的な人間集団の在り方¹²⁾に抵抗を覚えるような経験にさらされていない人たちは、理念によって現状を批判する足場を持ってない。というのは、仮にそうした経験に直面する少数者や弱者がいたとしても（また実際にいたし今もいるのだが）、その少数者や弱者に声を上げさせないような権力のテクノロジーが集団全体に働いているから、彼らは弱者や少数者の声を聞けないからである。そしてその声が聞こえないからこそ、男女の長所と短所を相殺すれば平等が成立するという過去から脈々と受け継がれてきた主張を正しいものとして無意識に受け継いでしまうのだ。しかし、だからと言ってそれで済むわけではない。なぜなら、そうした社会の安定は、先の経験に直面しても声すら出せなかった人たちの踏み台にして成り立つにすぎないからである。

そのことに気づいてもらうためには、西洋近代思想が提示してきた個人の平等の理念をジェンダー教育の一環としてか、もしくは、それとは別に導入しない限り、ジェンダー平等の理解と実現はないと筆者には思われる。もちろん、平等の理念とてそれぞれの時代の人たちがその都度掲げる理念なのだから、理念自身もまた偏向の危機に常にさらされる。¹³⁾しかし、そうした理念が偏っているかどうかについて論じる場も哲学や倫理学にしかない。従って、理念の批判を敢行するためにも、哲学教育の導入が必要不可欠なのである。

-
- 11) この両者の内のどちらかに偏向せず、等しく重視しているのがジェンダー論の理想とする個人である。そうした個人の理想はキャロル・ギリガンの議論にも見られるものである。この段階でおそらくジェンダー論の地平を越えて、クィア理論の地平が現れるであろう。キャロル・ギリガン『もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティー』、岩男寿美子監訳、川島書店、1986年、p.295、参照。
- 12) こうした人間集団では、個人はその集団での特定の役割を担う者として自覚されるのであって、個人は個人として自覚されないとと思われる。それは、非社会的なあり方である。私見では、「世間」がそれに相当するのではないかと推測される。また、西洋では、世間の否定によって個人と社会が成立してきたということも併せて指摘しておきたい。阿部謹也『西洋中世の愛と人格—「世間」論序説—』、朝日新聞社、1992年、pp.109-111参照。
- 13) ホッブズの考える個人やカントの考える理性的存在者が男性モデルであるのは、フェミニストが指摘するとおりである。従って、彼らの理念を固定的に確実なものと考えて、それらをジェンダー教育に導入することに筆者は賛成するものではない。むしろ、人間集団の伝統的な価値から一歩ひいた足場、つまり、理念の視点をジェンダー教育に導入するというところに重点がある。

※豊橋創造大学「哲学」、「生命倫理」、愛知教育大学「西洋宗教思想」、「科学技術と人間・入門」、名古屋学芸大学短期大学部「人間理解A」の受講者の皆さん、ならびに中京看護専門学校1年生、愛知県立桃陵高等学校専攻科2年生の皆さんには、快くアンケートに協力していただきました。感謝申し上げます。